

昨日見た夢、今日流す涙

晩 ばん

蔵仁 くらひと

## 1 新宿の雑踏（昼）

いきなり雷鳴がとどろき、放電球が生じる。車のガラスが砕け散り、その後  
に全裸の少女が現れた。

驚く人々をかき分け、少女はビルの影に消えていく。

## 2 中野家・食卓（朝）

食事をしている武志<sup>たけし</sup>。弟の和季<sup>かずき</sup>がパジャマ姿で起きてくる。

武志「今起きたのか？遅いぞ和季」

和季、生気の無い顔で兄を見る。のろのろとテーブルに着く。

武志「まあ、そうやって、のんびりしてられるのも学生の間だけだ。今の内にゆ  
っくり楽しむんだな」

武志は食事を終えて新聞を広げる。

武志「へえ、昨日、西新宿に全裸の女性が表れたってさ」

和季、興味を示さない。テーブル上のテレビのリモコンを触っている。

母、志野<sup>しの</sup>がトーストをテーブルに運んでくる。

志野「和季。もう少し早く起きないと。学校、ちゃんと行ってるの？」

新聞越しに武志がいう。

武志「母さん。無駄、無駄。こいつに何を言っても」

志野「いったい誰に似たのかしら。お父様は、夕べも大学で泊まって研究をして  
らっしゃると言うのに」

武志「親父殿はまた徹夜かい。研究も大事だけど、母さんが気をつけてやらない  
と、親父、体を壊しちゃうぜ」

志野「あなたも体には気をつけてね」

武志「まあ、せいぜい気をつけるさ。でも、外務省ってところは、人使いが荒いか

ら」

武志、ゆつくりと新聞を畳み、立ち上がると悠然と部屋を出ていく。

和季、だまってトーストにバターを塗る。

### 3 大学・校門前（昼）

大学へ和季が入っていく。校門には「城南大学」とある。

### 4 大学の教室（昼）

学生達が談笑している。和季は、その輪から一人はずれて座っている。

学生A「おい、ニュース聞いたか」

学生B「見た見た。全裸女性現れる、だろ」

学生A「あの時間、俺は新宿にいたんだぜ。なかなかの美人だったんだろ。残念！」

学生B「ところでさ、来月、俺の家でパーティをするんだ」

学生A「さすが大企業社長の御曹司。ブルジョアは違うね」

学生B「みんな来ないか。ただし、恋人同伴で」

生徒達、口々に行くと言答える。一人の学生が和季に声をかけた。

学生B「中野も来ないか」

和季「そ、そうだな」

和季、少し興味を示す。

学生A「中野はそんなの苦手だよな。連れてくる相手もないだろうし」

和季は言いかけていた言葉を飲み込み、うつむく。

### 5 歩道橋の上（夕方）

和季がぼんやりと車の流れを眺めている。

菜摘「きゃー！」

背後の声に振り返る和季の顔に、紅いベレー帽が当たる。

菜摘「ごめんなさい」

近寄る少女に和季は帽子を渡す。あどけない笑顔で、頭を下げる菜摘。和季は、

菜摘から視線を「反らす事が出来ない。

菜摘「どうしたの。私の服、変かしら」

和季、あわてて首を振る。

菜摘「店の人に選んでもらって買ったから自信がないわ」

いきなり話しかけられ、返事に困る和季。

菜摘「あなた、中野和季さん、でしょ？」

和季「どうして、僕の名前を……」

初めて和季が口を開く。

菜摘、じつと和季の顔を見る。まるで懐かしい顔を見るように。

菜摘「都立北川高校陸上部所属、インターハイ候補。種目は……」

和季「百メートル。でも、もうずっと前の事だ。結局正選手にはなれなかった。

ここ何年かは走ることも忘れてる」

忘れていた、忘れようとしていた過去に触れられ、いつもより饒舌になる和季。

菜摘「なぜ走るのを辞めたの」

和季「嫌になったんだ。決まったレーンを、ただ走るだけの毎日が。コンマ数秒の時間に追われながら」

菜摘「それで、高校二年で陸上を辞めて、猛勉強して今の大学に入ったのね。名門の城南大学。学部は理学部物理学科」

和季「君は誰なんだ」

菜摘、質問に答えず、くるりとまわって見せる。明るくいう。

菜摘「ここは寒いわ。帽子をぶつけたお詫びに、お茶を飲ませたげる」

和季「飲ませたげる？へんな言葉だな」

菜摘「あら、おかしかった？こんな時、この時代では何ていうのかしら」

## 6 喫茶店（夜）

周りでは楽しそうに皆が会話をしている。

和季は居心地悪そうに周りを見ている。とびきり可愛い少女と差し向かいで座っているので落ち着かないのだ。知り合いがいるとバツが悪い。

菜摘「どうしたの。誰か捜してるの」

和季「いや、何でもない」

菜摘は、にこにここと和季を見つめている。

思い切ったように和季はたずねる。

和季「でも、どうして？」

菜摘「何？」

和季「君はなぜ、僕の高校時代を知っているんだ？君も陸上競技の選手だったのかい」

菜摘「違うわ。それに、私は高校以外のあなたも知ってるのよ」

和季、不審気に菜摘を見る。

菜摘「それに、私は、あなたが今のままじゃいけないって誰よりも知っているわ。たぶん、あなたよりもね」

和季「今のまま？」

菜摘「あなただって、今のままじゃ駄目だって思っているはずよ」

和季「変なことをいわないでくれ。僕は今のままで何の不満も……」

突然、菜摘の目から大粒の涙がこぼれる。和季、驚いて言葉が途切れる。

菜摘「違うわ。今のあなたは本当のあなたじゃない。私は本当のあなたを知ってるもの」

菜摘、お金を机のレシートの上に置いて、顔を伏せたまま店を走り出ていく。

和季、呆然とそれを見送る。やがてぼそりと呟く。

和季「本当の……僕？」

和季、高校時代のアルバムを広げている。

アルバムを指でなぞりながら、少女の顔を、捜し求めている。

和季「いない……」

#### 8 大学の門の前（昼）

和季がうつむきかげんに門を出ていく。

#### 9 歩道橋の上（昼）

和季が歩道橋に登ってくる。誰もいない。手すりにもたれて行き交う車を見ている。ふと気配を感じて振り返ると、菜摘が立っている。

菜摘「夕べはごめんなさい。突然帰ってしまった」

和季「名前……。なんて言うの」

菜摘、しばらく躊躇する。

菜摘「なか……。にし菜摘」

和季「なつみ？」「夏」に、美しいの「美」？」

菜摘「いいえ、菜の花の「菜」に「花を摘む」っていう字を書くの。私が生まれた時、庭に菜の花が咲き誇っていたから……。そう言って、おじいさまがつけて下さったの」

和季「中西菜摘……。か。どうして、君は僕の事を知っているんだ」

菜摘、黙ったまま、和季を見つめている。

和季「夕べ、僕は高校の時のアルバムを調べてみた。でも、君の写真は無かった。

君は僕と同じ学校じゃないらしい」

菜摘「あら、そんな事はひと言もいってないわ。だって、私はまだ十七歳だもの」

和季「じゅうなな！でも、とても高校生には見えない。年上かも知れないと思ってた」

菜摘「私たちの時代はね、みんな大人びてるの」

和季「私たちの時代？」

和季、わけが分からなくなって頭をふる。

菜摘「いいわ。もう言っちゃう。私はね、五十年後からやって来たの。つまりタイムトラベラーってわけ」

和季、呆然と菜摘を見る。穴のあくほど菜摘を見つめた後で、くるっと背を向けて歩き出す。

菜摘「待って」

追いかける菜摘を振り払うように、和季は歩いていく。

菜摘「信じてくれないの」

和季、立ち止まって菜摘を見る。

和季「信じろってという方が無理だろ」

和季そう言い捨ててさらに歩き出す。

菜摘が和季の前に回って、叫ぶようにいう。

菜摘「分かったわ。あなたに証拠を見せて上げる」

和季「どんな証拠があるんだい。タイムマシンでも見せてくれるのかい」

からかうように言う和季。

菜摘の表情は真剣そのものだ。

菜摘「いいえ。タイムジャンプする時、品物は何も持って来れないの」

和季「へえ、すると君はすっぱだから、こっちに来た訳だ」

和季がそう言うと、菜摘の頬がかーっと真っ赤に染まった。

菜摘「タイムジャンプする場所は西新宿って決まってるから……。なるべく人のいない時間を選んだつもりだったけど……」

和季、驚きで口がふさがらない。

和季「じゃあ、君が……。西新宿の全裸女性！」

菜摘「とにかく、明日のお昼に、ここに来て。証拠を見せるから」

立ち去る菜摘。和季、追いかけてようとすが菜摘の背がそれを許さない。

結局、彼女が見えなくなるまで目で追うだけの和季。

#### 10 歩道橋の上(昼)

和季が時間通りに到着すると、菜摘が待っていた。

和季の姿を確認すると、菜摘は先に立って歩きだした。

菜摘「行きましようか」

和季、あわててそれを追う。

和季「ちょっと待ってくれ。中西さん」

菜摘、歩きながら答える。

菜摘「菜摘でいいわよ」

和季「どこに行くんだ、菜摘」

菜摘「ついてくれば分かるわ」

#### 11 競馬場・入り口(昼)

たくさんの方が入り口から中へ入っている。

驚いた表情で競馬場の看板を見る和季

和季「ここに、証拠があるのかい」

菜摘「いいから。一緒に来て」

二人、中に入っていく

#### 12 同・馬券売り場(昼)

菜摘、慣れた表情で、馬券を買う。

菜摘「第八レース。連勝複式で1―5を十枚ちょうだい」

それをただ呆然と見る和季

13 同・観覧席(昼)

菜摘と和季が競馬を見ている。

第三レースが開催される。

馬がゴールに飛び込み、外れた馬券が宙に舞う。

和季「今の、当たったのかい」

菜摘「そうよ」

和季「まるでプロだな」

菜摘「プロじゃ無いけど、私の買う馬券は、全部当たるわ」

和季、驚いている。

14 同・出口(昼)

菜摘が現金を封筒に入れている。

菜摘「あなた、数学が得意でしょ。だったら、偶然だけで続けて五レースも勝てるかどうか分かるでしょう？」

和季「なるほど。君は未来を知っているから馬券が当たるというわけだ」

菜摘「そうよ。私は、こちらに来るときに、この年のレース結果を覚えさせられたんだもの」

和季「覚えさせられた？誰に？」

菜摘、周りを見回す。

菜摘「ここを出しましょう」

そう言って、和季の手を引いて歩き出す。

15 昨日の喫茶店(夕)

ウインドウの側の席に和季と菜摘は座っている。店内の客は少ない。

ウエイトレスがオーダーを聞いて引き下がる。

和季「さあ、話してくれ」

菜摘「何から？」

和季「何からでもいいよ。とにかく、何もかも」

菜摘「しばらく考えているが、決心したように話し出す。

菜摘「さっきので、信じてくれた？」

和季「信じるって何を？」

菜摘「私が未来から来た事よ」

和季「信じる……。どうだろうか。単に君が見かけによらず、競馬に強いだけなのかも知れないしな。それに、もし、レース結果が分かっているんだったら、どうして、もっと大金を掛けないんだ？」

菜摘「それは……。現在に影響を与えないためよ。本当は、今日みたいに、続けて勝ってはいけないの。私が生活していく上で、最低限必要なお金を手に入れるように言われているの。でも、あなたに信じてもらうためには仕方なかった」

和季、菜摘の目の真剣さに押されて、おもわず目を反らす。

和季「まあいいさ、君は未来から僕に会うためにやって来た。それはそれでいい。で、ぼくにどんな用があるんだ」

菜摘「まず、体を鍛えて欲しいの。それから物理の勉強をしてもらうわ」

和季「どうして？君は、僕の未来の家庭教師かい」

菜摘、その言葉にくすりと笑う。

菜摘「まあ、そんなものね」

和季「嫌だね。どうして僕が君の言う事を聞かなきゃなんないんだ」

和季の声が大きくなった。店の客が二人を見る。

ウエイトレスが注文の品を持ってきた。

和季、ウエイトレスが去るまで口をつぐむ。

菜摘、和季をじっと見つめる。

菜摘「どうしてって聞いたわね。教えて上げるわ。世界の歴史のためよ。人類のためっていつでもいいわ」

和季「歴史？人類？」

菜摘「そう。今から二カ月後に、アメリカのある財団が宇宙開発の為の人材育成を目的とした、USSという組織を作るの。そして、半年後には世界中からそのための優秀な人員を募集するわ。もちろん日本からも。あなたはそれに応募して、USSの一員になるのよ」

和季、全く信用していない。周りを見回しながら、声をひそめて、菜摘にいう。

和季「そんな大切な話を、こんな所でしていいのかい」

菜摘「茶化さないで。もし誰かが聞いても誰も本気にはしないわ」

和季、得たりとばかりに、うなずく。

和季「その中に、僕も入ってるんだろ」

菜摘、感情を抑えた表情で静かに話す。

菜摘「五十年後には、トキオロジイ時間学という学問があるの。日本で始まった研究よ。その学者が、ある時、恐ろしい報告をしたの。私たちのいる未来と違う、もう一つ別の未来が存在するって」

和季「パラレル・ワールド、平行宇宙ってやつかい」

菜摘、うなずいて続ける。

菜摘「その未来は、地球の破滅の未来だった。そして、二つの未来の分かれる時点が、今なのよ」

和季「それが、僕とどういう関係があるんだ」

菜摘「あなたが、今のままだったら、地球は破滅の未来方へ行ってしまうのよ！」

和季、ぼかんと口を開けている。全く信じていない。

和季「そんな大げさな！ひとりの人間で歴史が変わるもんか。ばかばかしい。もう少しましな嘘をついたらどうだい」

しばらく和季の顔を見た後で、菜摘、悲しそうに席を立てて店を出ていく。

## 15 繁華街から少し離れた道路（夜）

菜摘が早足で歩いてくる。後ろから、和季が追いかけている。

和季「待ってくれ。大きな声を出して悪かった。謝るよ」

菜摘が振り向く。その瞳は涙に濡れている。

菜摘「あなたは、自分の立場の大切さが分かっていないわ。国連が、どうしても歴史が変わる危険を冒してまで私をこの時代に送りこんで来たと思うの。歴史はあなたを中心に、大きく二つに別れているのよ！」

和季「こ、国連！ちょっと、待ってくれよ。何を勝手な事をいつてるんだ。僕は普通の人間だ。自分が何者なのか良く知ってる。そりゃあ親父は物理学者で、日本じゃ有名な教授さ。兄貴はエリート外交官。だけど、僕自身には何の取り柄もない。野心も大それた夢も無い」

それを聞いて、菜摘が静かにたずねる。

菜摘「それで、あなたは悔しくないの？」

和季「悔しい？何が？」

菜摘「私は知っているわ。あなたがいつも、お父様の陰に押しつぶされようとしている事を。いつもお兄様と比べられて苦しんでいるのを。だから陸上をやめて猛勉強したことも」

和季「どうしてそんなことを？」

菜摘「あなたの自伝を読んだから……私の時代の、ほとんどの子供たちは、あなたの自伝を読んで育つんだよ」

和季「ばかな……」

菜摘「ばかじゃないわ。あなたは半年後のテストに合格してUSSに入り、二十年後、歴史上初めての地球規模の宇宙開発組織の長官になるのよ」

和季、手を打つ。

和季「わかったぞ。君は小説家志望なんだろう。それとも、俳優志望？僕を使って、自分の力を試してるんだ」

菜摘、理想を裏切られた悲しみの瞳で和季を見る。

菜摘「あなたは、本当に、あの中野和季なの？沈着冷静で剛胆で、決断力に富んだ……五度に渡る戦争の危機を、たった一人で回避させた……世界中の親に、わが子にKAZUKIという名前を着けさせた英雄なの？」

和季、菜摘の言葉の真剣さに気まずい想いをしていう。

和季「やっぱり、君は人違いをしてるんだよ。死ぬまで、僕はただの一般人だ」

菜摘「信じないなら信じなくてもいいわ。でも、明日から私のスケジュールに従ってトレーニングをしてちょうだい」

和季「嫌だよ」

菜摘「お願い。私に出来る事なら何でもするから」

和季の表情が、少し動く。

和季「本当に？」

菜摘、不安そうにうなづく。

和季「何でもする？」

菜摘、怯えながら和季を見る。

和季「実は、来月、友だちの家でパーティがあるんだ。それに、僕のパートナーとして出てくれないか」

菜摘、ほっとして。

菜摘「それだけ」

和季「ああ、それだけだ」

菜摘「いいわ。それじゃあ、約束よ。明日の朝五時に、あの歩道橋で」

16 歩道橋の上（早朝）

トレーニングウエア姿の和季が階段を上がってくると、同じくトレーニングウエア姿の菜摘が待っている。

菜摘「さあ、始めましょう。まずは軽く走って」

17 住宅街（早朝）

和季が走っている。菜摘がマウンテンバイクに乗って伴走する。

18 公園・入り口（早朝）

二人が公園の中に入っていく。

あたりに人影は無い。

19 同・芝生の上。

和季が、菜摘のサポートでストレッチをしている。

和季「ところで、その試験ってというのは、いったいどんなものなんだい」

菜摘、和季の背を押しながら答える

菜摘「単なる基礎体力を計るテストよ。資格試験だから、基準をクリアすれば合格よ。競争はないわ」

和季「その内容は」

菜摘「百メートルは十一秒以内。幅跳びは七メートル以上。遠投は百メートル以上。四百メートルは五十秒以内」

和季、いきなり立ち上がる。

菜摘「どうしたの？」

和季「冗談じゃ無い。オリンピック選手じゃないぞ。とんでもない。競争なんて無いはずさ、そんな体力を持った人間なんてそこらにいるはずがない。その組織は、スーパーマンを欲しがってるのか？」

菜摘「USSは、それだけの価値のある組織なのよ」

菜摘、和季の肩に手を掛けながらいう。

菜摘「大丈夫。歴史的には、あなたは合格してるんだから」

和季「でも、だめな場合もある？」

菜摘、うなづく。

和季「その時は、世界は破滅！なんて事だ」

菜摘「大丈夫よ。私の立てたスケジュールにしたがってトレーニングをすれば、必ず合格するわ」

和季「君の立てたスケジュール？」

菜摘「正確には専門家が立てたスケジュールなの」

和季の顔に、期待と好奇心が閃く

和季「専門家？未来のスポーツ・トレーナーかい」

菜摘「いいえ、文学者よ」

和季「ぶ、文学者？」

菜摘「そう、文学者が、あなたの自伝から見つけたのが  
がつくり肩を落とす和季。

菜摘「さあ、そんなに心配しないで。立ち上がって」

和季「もう次のトレーニングかい」

菜摘「トレーニングじゃないわ。こっちへ来て」

20 同・芝生の上（もっと広い場所）

和季の手を取る菜摘。

菜摘「さあ、手をこっちに回して」

自分の腰に和季の手をまわせる菜摘。どぎまぎする和季  
和季「こうかい」

和季と菜摘、ダンスの姿勢をとる

和季「これは、何？」

菜摘「ダンスよ！社交ダンス」

和季「ダンス！」

菜摘「来月、パーティに行くんでしょう。ダンスぐらい踊れなくてどうするの。さあ、右足からよ」

ぎこちなく、すり足をする和季

和季「君は、ダンスが上手いんだね」

菜摘「おじいさまとよく踊ったもの」

しばらくダンスの練習をする二人。

21 大学・正門（昼）

門を出てくる和季

22 歩道橋の上（昼）

和季が階段を上がってくると、菜摘が自動車を眺めている。脅かそうとして、こっそり近づくが、菜摘の肩が小刻みに震えていることに気づく。

和季「菜摘……」

和季の声に驚いて、あわてて顔をこすりながら振り向く菜摘。明るい笑顔を見せる。

和季「菜摘、今……」

和季、言葉が続かない。突然、菜摘のことを何も知らないことに気づく。

菜摘「さあ、行きましょう」

和季「行くなって、何処？」

菜摘「行けば分かるわ」

23 歩道橋の下

菜摘、歩道橋を降りて、国道沿いを歩いていく。

24 マンション・入り口 (昼)

菜摘と和季が入っていく。和季は珍しげに、辺りを見回している。

25 同・エレベーターホール

菜摘、エレベーターのボタンを押す。

26 同・エレベーターの中

エレベーターの中は、二人だけ。

和季「何処に行くの」

菜摘「あなたの勉強部屋よ」

和季「勉強部屋？」

エレベーターが到着する。

27 同・廊下

二人、歩いてくる。菜摘、ドアの前で立ち止まり、鍵を開ける。

28 同・ドアの前

菜摘、ドアを開ける

菜摘「さあ、どうぞ」

29 マンションの一室 (昼)

広い部屋に、大きな本棚と大きな机が置いてある。ただそれだけの部屋。本棚

の中には、本がぎっしりとつまっている。

和季「ここは……」

菜摘「試験は、スポーツだけじゃないのよ。学問の方もテストされるの。まあ、そっちは専門分野だから、まだ楽だと思うわ。でも、これから、一日五時間以上、ここで勉強してもらうわ」

和季「君は、ここに住んでるのかい」

菜摘「違うわ。ここはあなたの勉強用に借りたの」

和季「豪勢だな」

菜摘「あら、安いものよ」

菜摘、にっこり笑って言う。

菜摘「世界の未来が、かかっているんですもの」

和季「だけど、どうやってその金を……ああ」

菜摘「過去データを色々覚えさせられたって言ったでしょう。インターネットの株トレードを使えば簡単なのよ」

和季、椅子に座ってみる。ふと思いついて菜摘に尋ねる。

和季「ところで、その試験で、難しいのかい」

菜摘「参考になるかどうかわからないけど。定員一人に対して、志望者は五千人だったと聞いているわ」

和季、飛び上がる

和季「とんでもない。倍率五千倍！」

菜摘が勇気づけるように言う。

菜摘「大丈夫よ。他の人は、半年後にそんなテストがあるなんて、夢にも思っていないわ。その間にがんばるのよ」

和季、力無くうなずいて本を開ける。

30 住宅街（早朝）

菜摘の伴走のもと、和季が走る

31 公園・芝生の上（早朝）

菜摘とストレッチを行う和季

32 住宅街（雨・早朝）

雨具を着けて走る二人。

33 公園・芝生の上（早朝）

全力疾走する和季。ストップウォッチを押す菜摘。

34 公園芝生の上（早朝）

トレーニングウェアのまま、ダンスの練習をする二人。和季が菜摘の足を踏んでしまう。

35 マンション・勉強部屋

レポートに。ペンを走らせる和季。横で、菜摘が本を読んでいる。

36 公園・砂場（早朝）

和季が走ってきてジャンプする。砂の上には白い線が引いてある。しかし、和季は、その線を越えられない。

37 公園・芝生の上（早朝）

走ってくる和季。

ストップウオッチを押す菜摘。

和季、地面に寝ころぶ。

和季「どうだった」

菜摘「十一秒二」

和季「ぜんぜん縮まらないな」

がつくり肩を落とす和季。

菜摘「大丈夫よ、ここ二週間で、随分タイムが上がったわ。さあ、今日はこれで

切り上げましょう」

和季「今日は随分早いな」

菜摘「忘れたの？今日はパーティの日よ」

和季「あ、そうだった。すっかり忘れていたよ」

菜摘、走り去りながら言う。

菜摘「それじゃあ、午後六時に、いつもの場所で」

### 38 住宅街（夕方）

和季がダークスーツで歩いてくる。トレーニングのために引き締まった長身をスーツが引き立て、顔つきもたくましくなっている。

### 39 歩道橋（たそがれ時）

飛ぶような軽い足どりで、和季が階段を上がってくる。まだ歩道橋の上には誰もいない。

和季、足元を流れるヘッドライトを見おろす。ふと、気配に気づいて後ろを振り返ると菜摘が立っていた。

白いドレスに身を包む菜摘は、車の淡いライトに照らされて、まるで妖精のよう  
うに可憐だ。

和季「行こう、菜摘」

和季、先に歩きだすが、すぐに振り返って菜摘に近づき、彼女を手を取ってエスコートして階段を降りていく。

40 パーティ会場・玄関(夜)

沢山の着飾った男女が、三々五々とやって来る。

学生A、女性連れでやって来る。

学生B「良く来てくれたな」

やってくる客に顎をしゃくりながら

学生A「盛況じゃないか」

学生B「なあに、親父の知り合いばかりさ。どうせ、次の選挙を睨んでるんだろ」

学生A「それより、今日、中野が来るんだって？」

学生B「ああ、ぜひに、というから招待した」

学生A「しかし、あいつ、パートナーいるのか。ま、関係ないけど。最近つきあ

い悪いしな」

学生Aタバコをくわえてから、思いついたように言う。

「ひよつとして、妹を連れて来るんじゃないか？」

学生B「いや、あいつは兄貴と二人兄弟のはずだ」

その時、タクシーがすべるように入ってくる。

ドアが開いて、和季が降り立つ。

学生A「噂をすればだ……」

学生A、和季が手をさしのべて車から降りた菜摘の美しさに口を閉じる。

和季「今日は招待してくれて、ありがとう」

学生B「友達じゃないか、当たり前さ。ところで、この方は」

和季「中西菜摘さんだ」

和季の紹介で菜摘は優雅に会釈する。

二人が会場に入って行くのを、学生達は呆然と見送る。

#### 4 1 同・ダンスホール内（夜）

着飾った男女が、シャンパングラスを持って談笑している。やがて、ホールの生バンドが、ダンスミュージックを演奏しはじめると、それぞれのカップルが、ダンスを始めた。

和季「うまく踊れるか心配だな」

菜摘「大丈夫よ。さあ、踊りましょう」

和季と菜摘、踊り始める。見事なダンスだ。

並いるゲストの中でも、とびきりのステップを見せる。

彼らの踊りを見て、人々はダンスをやめ、ホールの壁際に下がっていく。

その結果、和季と菜摘だけがホールの中央で踊るようになる。

音楽が終わると、割れるような拍手がダンスホールにこだまする。

和季「ありがとう、菜摘」

菜摘がうっとりとして答えた。

菜摘「あなたこそ、本当に踊りが上手ね」

#### 4 2 大学の教室（昼）

和季が入っていくと、皆が新聞を持つ学生を囲んで話をしている。

学生Aが和季に気づいて手招きする。

学生A「おい、中野、今朝の新聞読んだか」

和季、黙って首を振る。学生A、和季に新聞を渡す。新聞の一面に、「宇宙

組織USS発足」と書いてある。

学生A「どうやら、日本からは公募するらしい。たった一人だけだな。あーあ。俺も参加しようかなあ。あと四カ月あれば、何とかなるかも……」

和季、新聞を学生Aに返し、席に着く。本を取り出して読み始める。

#### 43 マンション・勉強部屋(夜)

本に埋もれて和季が勉強している。その隣で、菜摘も本を読んでいる。

和季、ふと勉強の手を止めて菜摘を見る。

和季「菜摘、今日、USSの話が新聞に載っていた」

菜摘「そう。本当だって信じてくれた」

和季「もうずっと前から疑ってなんかいないさ。それより、聞きたい事がある」

菜摘「なに」

和季「試験が終わったら、君は未来に帰るのかい」

菜摘、にっこりと微笑む。

菜摘「いいえ、タイムジャンプは一度だけ、それも条件付きで可能だったの。もう再現できないわ。だから、私は死ぬまで、この世界にいるわ」

和季、晴れ晴れとした表情でうなづく

和季「そうか」

#### 44 公園・芝生の上(早朝)

和季が走ってくる。菜摘がストップウォッチを押す。

和季「どうだ？」

菜摘「十秒七。やったわ」

飛び上がって喜ぶ和季と菜摘。

4 5 住宅街（早朝）

和季が走っている。菜摘がマウンテンバイクに乗って伴走する。

4 6 公園・砂場（早朝）

和季が走ってきてジャンプする。砂の上には白い線が引いてある。和季はついに、その線を越えた。

拳を突き上げる和季。

和季「やったぞ！」

菜摘「やったわ」

菜摘が和季に抱きついた。二人の顔が近づく。

和季「菜摘、キスしてもいいかい」

菜摘、嬉しそうに言う。

菜摘「キスする時は、そんな事を聞かないものよ」

和季「じゃあ」

和季が顔を近づける。が、菜摘がそれを手で止めた。

菜摘「でも、恋人のキスはだめよ」

和季、うなずいて菜摘の頬にキスをした。

4 7 公園・芝生の上（早朝）

和季がボールを持って立っている。

菜摘「落ち着いてね」

和季「公開テストまで、あと十日。落ち着いてなんかいられないよ。四百は五十秒を切ったけど、遠投だけが、百メートルを越えないんだから」

菜摘「大丈夫。あなたならできるわ。今まで苦しい練習に耐えてきたんだもの」

和季、菜摘に微笑んで、ボールを持つ。息を整えて、一気にボールを放つ。

和季「はっ」

ボールは、きれいな放物線を描き、地面に書いた白線を越えた。

和季「やった！」

和季、喜んで菜摘を振り返る。だが菜摘は地面に倒れていた。

和季「どうしたんだ菜摘」

菜摘の顔色は蒼白だった。菜摘の額に触る和季。

和季「すごい熱じゃないか」

菜摘「大丈夫。何でもないわ。最近、風邪気味だったの」

菜摘、自力で立とうとするが、立てない。

和季「病院へ行こう」

菜摘「お願い、勉強部屋に連れて行って。少し休めば楽になるわ。お願い」

和季、不承不承うなずく。

#### 48 マンション・勉強部屋（昼）

毛布の上に菜摘が寝かされている。和季、心配そうに菜摘の顔をのぞき込んでいる。  
いる。

菜摘、目を開けて和季を見る。次いで体を起こす。

和季「だめだよ。もっと寝てないと」

菜摘「もう、大丈夫よ。でも、今日は疲れたから帰るわ。あなたは、コンデイションを崩さないように注意してね」

菜摘、ふらふらと起き上がりドアに向かう。

#### 49 マンション・エレベーター前

二人でエレベーターを待っている。

和季「頼むから、僕に送らせてくれ」

菜摘「駄目よ。大丈夫。私は一人で帰れるから」

エレベーターのドアが開き、菜摘が中にはいる。菜摘が和季を押し出すと、エレベーターのドアは閉まった。

50 マンションの廊下

和季が下を見ると、菜摘がふらふらと帰っていく。それを見て和季、すさまじい勢いで、飛ぶように階段を降り始める。

51 住宅地

菜摘が歩いている。その十メートル程後ろを和季が密かに歩いている。

52 歩道橋の上

菜摘、いつもの歩道橋をふらふらと上り、降りる。

53 歩道橋の下

菜摘、歩道橋を降りてすぐの、白い建物に入っていく。  
和季、何気なく上を見上げて驚く。看板には「上田病院」と書かれていた。

54 病院・玄関

菜摘が、患者に紛れて病院に入っていく。和季も後を追う。

55 同・廊下

菜摘はある病室に入る。和季はその病室の表札を見る。

表札には「中野菜摘」と書いてある。

衝撃を受ける和季。深く思い当たる表情になる。

医者がやってくる気配を感じ、和季は身を隠す。看護婦も点滴を持って、やって来る。彼らは病室に入る。

しばらくすると、医者が出て来る。

和季「すみません」

医者「なんでしょうか」

和季「この部屋におられる、中野菜摘さんは病気なんですか」

医者「あなたは？」

和季「僕は、中野和季と言います」

医者「君が、和季君か。菜摘さんからいつも話は聞いているよ。君は、彼女のため一人の親戚なんだね。で、いつ南極から帰って来たんだね」

和季、一瞬呆気にとられるが、すぐに相づちを打つ。

和季「え、ええ、昨日です。それで、菜摘は」

医者、ほっとした表情になる。

医者「あなたが帰って来られるのを待っていたんです。連絡を取ろうにも、なんせ、南極では少し遠すぎますからなあ」

和季「……」

医者、表情を引き締めて言う。

医者「菜摘さんは重度の放射線症にかかっておられます」

和季「放射線症……あの、エックス線とか宇宙線にさらされてなる病気の事ですね。それで、ひどいのですか？」

医者「残念ですが、もう手の施しようがありません」

和季「え？」

医者「手遅れです。残念ですが」

和季、感情が爆発する。

和季「嘘だ！嘘でしょう？そんなはずはない嘘だ！嘘だ！」

和季、床に膝をついて、半狂乱になる和樹。

医者は、それを黙って見ている。

やがて、和季は自制心を取り戻して尋ねる。

和季「興奮して申し訳ありません。それで、その事を彼女は……」

医者「最初に、病院にいられた時から、知っておられたようです。何でも、大学の実験中の事故だそうですが……」

和季「彼女が病院に来てから、どれぐらいになりますか」

医者「半年です」

和季、暗い表情でうなづく。

和季「それで、あと、どのくらい生きられるのですか」

医者「分かりません。実のところ、今まで生きているのが不思議なくらいなのです」

和季「面会はできますか」

医者「うなずいた。」

医者「彼女の願いを聞きいれて、ずっと外出を許していたのですが、先ほど外出から帰ってきて容態が急変したのです。今は、小康状態を保っています。意識もありませんから、お話をなされるなら、今のうちに……」

和季「ありがとうございます」

和季、頭を下げる。

## 56 同・菜摘の個室

菜摘が一人目を閉じてベッドに寝ている。

ドアを開けて和季が入ってくる。人の気配に気づいて、苦しい息の下から、目を閉じたまま話し出す菜摘。

菜摘「看護士さん。ごめんなさいね。心配かけて。でも、もう大丈夫よ。明日の

朝も、いつもと同じように出かけられるわ」

和季、じっと菜摘を見つめる。

菜摘「ねえ、看護師さん……」

菜摘、目を開け、和季をみて愕然とする。

和季「明日の朝は、僕は一人でトレーニングするよ。世界一のトレーナーに教えてもらったメニューをこなしてるんだ。本番で失敗するわけがない」

菜摘「かず……」

和季「だから、安心してゆっくり休むんだ。菜摘」

床に膝をついて菜摘の顔をのぞき込む和季。

菜摘「ごめんなさいね」

和季「なぜ、謝る」

和季、菜摘に顔を近づける。

和季「菜摘、キスしてもいいかい。恋人のキスじゃないよ。これは……おじいさまのキスだ。君は僕の素敵な孫だからな」

菜摘、涙ぐんでうなづく。

和季、菜摘の額にキスをする。

菜摘「悲しまないでね。最初から分かっていた事だから」

和季「でも、どうして……タイムジャンプの副作用かい」

菜摘「違うわ。未来で起こった宇宙での事故が原因なの」

和季「ひょっとして……その事故で僕は死ぬのか」

菜摘、迷った末、うなづく。

菜摘「事故が起こった時、私はおじいさまと宇宙ステーションにいたの。」

おじいさまのお部屋で話をしていたら、突然、ステーション全体が激しく振動して爆発が起こった。

隕石が、燃料保管庫を貫いたための事故よ。数万分の一の確立の事故だった。

私は、そのショックで気絶してしまったわ。気がつくとおじいさまに宇宙服を着せられて、脱出ポッドに入れられるところだった。おじいさまは私の頭をなでると、ポッドの蓋を閉めて、私を宇宙に脱出させてくださった。すぐに宇宙ステーションは私の目前で大爆発を起こしたわ」

そこまで一息に話して苦しそうにせき込む菜摘。

和季「もういい、菜摘。黙って」

菜摘「いいえいいえ。聞いて欲しいの。死後、公表されたおじいさまの遺書で、五十年前の秘密が明らかになったわ。未来からやってきた誰かが、若いおじいさまを励まし助けたことが……すぐに実行委員会が作られ、五十年前の世界に送り込む人間を選ぶ公募が行われたの」

和季「君はそれに応募したんだな」

菜摘「それを聞いた時、私しかないと思った。私は肉親だったし条件にぴったりだったから、すぐ採用が決まったわ」

和季「条件？」

菜摘「ええ、他のことはともかく、その条件を満たす人が少なかったから、私が採用されたのよ。それはね『五十年前の世界での余命が半年以内の者』。未来に大きな影響を与えないための配慮よ。ステーションが爆発した時、私も宇宙線に大量に浴びていたから……」

和季「それで、前に、君は死ぬまでこの世界にいると……」

菜摘「あの爆発は多くのものを奪うかわりに、新しいものも与えてくれたわ。あの恐ろしい威力の爆発で、地球上に時間の穴が開いたの。その穴は五十年前に通じていた。前例の無い事だったから、どうなるか分からなかったけど、私はおじいさまに、もう一度会うためだったら何でもするつもりだった」

和季「そして、たった一人で、この世界にやって来たんだね。この無気力で、ぐうたらな僕に会うために」

菜摘、和季の頬をなでる。

菜摘「自分をそんな風にいわないで。それは、あなたを愛した人も、これからあなたを愛する人たちもおとし貶める事になる……」

和季、菜摘の手をしっかりと握る。

和季「菜摘、約束する。僕は必ずテストに合格するよ。世界なんてどうでもいい。ただ、世界でたった一人の君のために」

菜摘「うれしいわ」

NA「菜摘は目を閉じた。そして再び目を開く事は無かった」

57 試験会場・入り口（朝）

大勢の志願者が広い運動場に入っていく。

58 試験会場・遠投テスト

たくさん選手に混じって和樹の姿がある。

次々と選手がボールを投げる。やがて和季の番になる。

和季、ボールを握りなおして、全身の力を込めて、ボールを投げる。

和季「はっ」

ボール、大きな弧を描いて、抜けるような青空に向かって飛んで行く。

青空がアップになる。

カメラが引くと、そこは重厚な雰囲気とする書齋の中。

59 和季の部屋（三十三年後）

白髪になった和季。書齋の窓から美しい青空を眺めている。窓のすぐ側には菜の花が咲き誇っている。

ドアが開いて、若い男が駆け込んで来る。

息子「お父さん。生まれました。女の子です」

和季「そうか、生まれたか……」

息子「名前を考えてくれましたか、お父さん」

和季「娘の名前ぐらい、親が自分たちでつけるもんだ」

息子「いいえ、ぜひ中野宇宙局長官に着けていただきたいのです……」

和季「菜摘」

息子「は？」

和季「菜摘だ。菜の花を摘む子。菜摘」

息子「ありがとう、お父さん。いい名前だ」

息子、出ていく。

和季、空を仰ぎながら低く呟く。

和季「もうすぐ会えるな、菜摘……」

(FO)

了